

ガリラヤで活動を開始したイエス様の周りには、たくさんの人たちがついて来ていました。遠くからイエス様のうわさを聞いて駆け付けた人もいれば、ペトロやアンデレ、ヨハネ、ヤコブのように漁をしているときに声を掛けられた人など様々でした。

イエス様はあるとき、弟子たちの中から十二人を選んで、使徒と名づけました。彼らは十二弟子、あるいは十二使徒と呼ばれています。この十二という数には意味があります。

旧約聖書においては、この十二はイスラエル部族の数として用いられています。ヤコブの子であるルベン、シメオン、ユダ、イサカル、ゼブルン、ダン、ナフタリ、ガド、アシェル、ベニヤミン、そしてヨセフの子であるエフライム、マナセの名前がそれぞれ部族の名前となり、その十二の部族で神の民全体を表すと考えていきました。

新約聖書の中でも、この神の民としての十二部族という意味が受け継がれていきます。したがって弟子一人ひとりの名前よりも、その人数が十二人であることが重要なのです。そのため各福音書に十二弟子の名前のリストが出てきますが、タダイとアルファイの子ユダのように、福音書によって一致しない名前もあります。

イエス様が逮捕され、十字架につけられたときには、イエス様を裏切ったイスカリオテのユダも十二弟子の一人でした。ユダはイエス様が逮捕された後、自らの命を絶ちます。そのためイエス様の復活のときには、弟子の数は十一人に減ります。

しかし十二という数字は神の民という背景を持つとともに、神の国の到来のしるしでもある大切なものです。したがって十二という数を保つために、使徒言行録にはイスカリオテのユダが欠けた代わりにマティアを補充する必要があったのです。

今回は「終末」です。楽しみに。



「最後の晩餐」

アンドレア・ダ・ミラノ

(1475～1547年)

朝になると弟子たちを呼び集め、その中から十二人を選んで使徒と名付けられた。

(ルカによる福音書 6章 13節)

